町長ひとりごと ㊲

斉藤 譲

わがふる里は、いま冬枯れの中である。辺りは、ものみな彩りを落し、吹きすさぶ北風の前に、息を凝らし、じっとうずくまっている。いよいよ冬もたけなわである。

こんな一月半ばのある日、見も知らぬ遠い福井県越前町の町長から、「越前の水仙の香りをお届けします」というラベルの貼られた箱が、私のもとに届いた。全く身に覚えのない方からの贈り物であり、戸惑ったが、とに角箱を開けてみた。そのとたん、水仙のむせかえるような香りが、部屋中に漂い、町長室は一転春の気配となった。箱の中には、四十本ほどの可憐な黄色い水仙が入っており、そこには町長からのメッセージが添えられていた。思いがけない北陸路からの春の便りであり、花の便りであった。一読をして、私は何ともいいようのない爽やかさと、ロマンの香りを胸いっぱいに感じた。花はみんなにお別けできないので、せめてこのメッセージの全文をここに紹介し、町民の皆さんとこの素適な気分を分かちあいたいと思う。

新春を寿ぎ、ふるさと創生にご尽力されておられる趣、慶賀に存じます。

水上勉先生の「負籠の細道」の一節に

〝旅は孤独を味わせる。と同時にかみしめる孤独から勇気を培うものだと私はかねがね思うているが、越前岬ほど私に人生を考えさせた場所はないようである。黒い断崖に風が吹きすさび、その丘になぜあのような花が咲くのだろう。黄色い水仙であった。冬の凍て土に花が咲くのだ〟

今、越前岬には、この水仙が咲き誇っています。

遠く地中海より、シルクロードを経て中国に渡り、対島暖流に乗りこの地に群生したものと推測されています。

私たちの町越前町は、越前加賀海岸国定公園の中央部に位置し、越前かに、甘えび等の主産地でもあります。

越前岬一帯に咲いた蕊匂う水仙をお届けいたしますので、お部屋の一隅に添えていただければ幸いです。

益々のご発展を心から祈念申しあげます。

平成二年一月吉日

越前町長　佐々木　修

別の説明書によると、越前町は、ふるさと創生事業の一環として、全国三千二百有余の市町村に、同じようにこれを贈られたとのことである。

兎角、これだけの資金があるならば、先ず住民生活に直接役立つものを優先にと、つい目先、足元の問題にこだわりがちな行政の中で、この発想と実践は見事である。

私は早速、役場の資料で越前町の姿を調べてみた。残念ながら資料は十数年も前のものであり、現況とは大きく異っているかも知れないが、そこにはこう書かれている。

越前町は、福井県海岸の中央に位置し、日本海に面するため、対島暖流の影響で冬も温暖で降雪も少ないが、自然的立地条件に恵まれず、海岸段丘と山が多く、大きな河川や農耕適地が極めて少ない。県の代表的な水産地として栄え、水産事業と観光事業に力を入れている。

なお、最近の人口は、七七六三人と別の資料にはある。

私は、あらためて、厳しい自然条件を逆手にとって、観光事業を発展させ、町起こしをしようとする越前町の燃えるような情熱を、爽やかなメッセージの紙背と、水仙の香りの中に強く感じた。越前町に、心から拍手と感謝を贈りたい。

わが光町も、負けずにみんなで力を合わせ、英知を寄せあいキラリと光るふる里を、建設しなければならない。

水上勉も語るように、水仙の気高さは、寒い風が吹きすさび、凍てつく土の上に咲くところから生まれる。人生も、またこれと同じである。新成人として社会に羽ばたく若者、そして、いま高校、大学の受験地獄で苦闘する若者、いずれの人達もこの厳しさを乗りこえ、水仙のような花を、これからの人生、社会で咲かせて欲しいものだ。

私はいま、遠い日本海を見下す小高い丘の斜面に、群れ咲き誇る水仙の里に熱い思いを馳せている。